



Title	明治におけるジャンヌ・ダルク : シラーの『オルレアンの少女』受容をめぐって
Author(s)	渡邊, 洋子
Citation	独文学報. 1998, 14, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治におけるジャンヌ・ダルク

——シラーの『オルレアンの少女』受容をめぐる——

渡 邊 洋 子

1

近代日本のドイツ文学受容にとってフリードリヒ・シラーがとりわけ大きな位置を占めていることはよく知られている。日本にドイツ語が伝来して以来、シラーはドイツ語教本のなかに、また文学史などのなかに必ず登場する作家であった。日本のゲルマニスティクにおけるシラーの重要性はあらためて言うまでもないだろう。だが明治から大正初期の時代に関して言うならば、シラーの受容には二つのピークが見出される。ひとつは自由民権運動のただ中にあった明治10年代、ひとつは日本がいちおうの安定期に入った明治30年代である。小論では、日本のゲルマニスティクの確立されつつあった明治後半期、つまり第二のピークに焦点をあててシラーの受容を見ていくことにする。

明治10年代には、自由民権運動の高まりのなかで『ヴィルヘルム・テル』の翻訳翻案が頻出した。明治3年から6年にかけて刊行された河津裕之訳『西洋易知識』におけるテルについての記述に促されたかのように、明治13年には齊藤鉄太郎訳『瑞西独立自由の弓弦』が、明治15年には山田郁治訳『哲爾自由譚』が出版された。明治19年頃の仕事とされる中川重麗訳の『維廉、的児、自由之一箭』は明治23年「少年文武」に一部掲載された。明治20年には葦田東雄の『字句血涙 回天之弦声 乾坤二巻』が出たが、これもシラーの『ヴィルヘルム・テル』に題材を借りた政治小説である。明治日本のドイツ文学受容はシラーの『ヴィルヘルム・テル』とともに始まったと言ってもいいだろう。この第一のピークにおけるシラー像は政治的理念にあわせて作り上げたもので、けっして正確なものとは言えないが、未曾有の時代の激動に立ち向かう人々の心に強い感銘を与えたことは確か

である。後により本格的な翻訳がなされ、シラーの全体像が学問的に明らかにされるようになってからも、この初期のシラー像は、一般にさまざまな形で受け継がれていった。

日本が近代国家としての外形を整えていくにつれて、実学を取り入れるだけでなく西欧の精神をも受容することが、ますます求められるようになる。ドイツ語を教養の基盤にする人々が増え、ドイツ文学への関心も芽生えるなかで、シラーもさまざまな形で翻訳・紹介されるようになった。明治21年には福地桜痴の『春雪瑪利御最後』（マリア・シュトゥアルト）が東京日々新聞付録として掲載されたが、これは第一幕のみが忠実な翻訳で、それ以降は筋書きになっている。シラー紹介の主たるものとしては、明治22年の北村三郎による『世界百傑伝』中にシラー伝があり、森鷗外も明治22年から23年にかけて「しがらみ草紙」に『シルレルが医たりし時のことを記す』を、明治24年から25年にかけて「早稲田文学」に『シルレル伝』を掲載している。明治26年出版の連山人（巖谷小波）・霧山人（坂田孫四郎）による『独逸文壇六大家列伝』には「シルレル伝」がある。明治26年には内田不知庵の『如安外伝』（オルレアンの少女）が読売新聞に、明治29年には指月（藤井信吉）・自適（武井悌四郎）の翻訳『マリア、スチュアルト』が「国民の友」に掲載されている。また同年、民友社の「拾貳文豪」の号外として、緒方維嶽の『シルレル』が出たが、これは日本最初のシラー研究書と言われている。明治30年には井上藤吉の『大文豪』でシラーが論じられ、明治35年には登張竹風（信一郎）の『気焰録』が出て、なかに「ゲエテとシルレル」がある。明治36年出版の葉山万次郎著『独逸国民文学史』では、7世紀頃からゾーダーマン、ハウプトマンに到る広範な文学史が扱われているが、当然ゲエテ、シラーについては多くのページが割かれている。同36年には古雪（藤澤周次）¹ 訳の『オルレアンの少女』^{をとめ}、徳田秋江の『シルレル物語』が出版され、さらに巖谷小波の『脚本 瑞西義民伝 ウ井ルヘルム、テルの一節』が文芸倶楽部に掲載された。

2

日清、日露の戦争をへて日本が近代国家としての自信を持ちはじめた明治38年は、シラー没後100年にあたっていた。東京では大規模な式典が催

され、ドイツ公使をはじめ各界の名士、多くの学者、ドイツ語学文学研究者や学生が出席したと言われている。東京帝国大学の卒業生を中心にした雑誌「帝国文学」はこの年、第11巻第7号にカール・フロレンツの「シルレル百年祭記念講演」(片山正雄訳)を掲載し、さらに「臨時増刊第二、シルレル記念号」を刊行した。ここには登張信一郎、片山正雄、石倉小三郎、葉山萬次郎、三浦吉兵衛による伝記的研究、『ヴァレンシュタイン』を除く8大戯曲の評論、「戯曲家としてのシルレル」(藤代禎輔)、「ゲーテとシルレルの交誼」(片山正雄)、「思想家としてのシルレル」(深田康算)、「詩人としてのシルレル」(桜井政隆)、「太陽神話としてのウィルヘルム・テル」(芳賀矢一)の論文等が発表されている。この記念号の規模や内容を見れば、ドイツ文学の受容がこの頃すでに専門の研究者の手に移り、学問的レベルでの取組がなされていたことがわかる。さらに「帝国文学」第11巻8号には石倉小三郎の『『メッシナ』のコオルに就いて』及び橋本青雨による『誰が罪』(『犯罪者』の未完の翻訳)が掲載されている。またこの年には佐藤芝峰の『うゐるへるむてる』が出版された。時代を徳川期に移し、人名地名風俗などすべて日本風になってはいるが、これはテキストにほぼ忠実な初めての完訳であり、巻末には「シルレル畧傳及作品年表」も添えられている。秋元蘆風の『シルレル詩集』の出版は明治39年、『鐘の歌評釈』は明治40年である。

シラーに関する研究はこのように充実し、まさに第二のピークを迎えたといえるだろう。ただここで主流になったのが、理想主義的・国家主義的色彩の濃いシラー像であり、それが以後の日本におけるシラー研究にある方向を与えたことは否定できない。「シルレル記念号」の序詞に端的に現れているように、この頃シラーは何よりも「人道の永なへなる理想の為に健闘して人生最上の光榮を擔ひたる人格の人」として崇拜され、その作品はこの偉大なる人の「一大理想を表現したるもの」とされた。さらにシラー受容の意義は、「独逸民族の今日の優秀」をもたらした「シルレルが偉大なる靈光の感化」を、「露西亜帝国と戦を交へてより以来更に世界史上の一大勢力となった」日本にも及ぼし、「世界人道の幸福と平和の為に更に新しき光明と意義とを世に齎らす」べき天職を国民に自覚させることにあると考えられていたようである。²

学会レヴェルでのこのような受容に対して、一般の人々の間でのシラー受容はどのようなものだったのだろうか。明治10年代のシラー人気が去った後も、20年代にはドイツ帰りの新鋭である森鷗外が伝記を書いて注目を集め（樋口一葉は日記にこれを読んだことを記している）³、新聞雑誌にシラーの翻訳などが散見されることは、すでに述べたとおりである。30年代になると活字文化の発展と読者層の広がりにもなって⁴シラーの知名度もより高くなっていく。すでに明治27年の「婦女雑誌」には橋本とし子の『スタウファヘルの妻』という記事が出ている。明治30年には「少年文集」に国府犀東の『シルレル伝』が、「中学新誌」に圭円生の『シルレル伝』が掲載された。明治31年の「家庭雑誌」115号には『古寺の鐘、詩人シルレルの事』と題する（宮崎）湖処子の記事が載っている。前述の徳田秋江による『シルレル物語』は、世界の名作に接したいという読者の要求に応じて企画された「通俗世界文学シリーズ」の一冊だが、一般の読者の嗜好にあわせたセンチメンタルな語り口で『ヴィルヘルム、テル』と『メリー、スチュアート』を物語風に再話したものである。また明治38年には、大村仁太郎が若い読者の間から「第二のシルレル」となるべき「国家的大詩人」⁵の出現することを待望して、「中学世界」に『詩聖シルレル』を連載しているし、登張竹風も「中学世界」定期増刊号『世界三十六文豪』に頼山陽と比較してシラーの生涯を物語っている。明治39年には橋本青雨が「女子雑誌ムラサキ」に『詩人シルレル夫妻』を載せ、シラーをめぐるレンゲフェルト姉妹について、才女である姉カロリーネの友情、妻となったシャルロッテの「内助の功」⁶などについて語っている。

だが一般の人々にシラーの名を知らせたのはとりわけ、明治38年に蕨升（二代目市川左団次）が明治座で上演した巖谷小波の翻案劇『瑞西義民伝』のせいであろう。演劇改良のさまざまな試みの一つとしての翻案劇は当時賛否両論のただなかにあったが、明治座ではユゴーの『エルナニ』、フランソワ・コッペの『王冠』につづいてこの『瑞西義民伝』が上演された。⁷ 前述の『脚本 瑞西義民伝 ウィルヘルム、テルの一節』に、蕨升が目をつけ交渉したところ、小波は「幸い今年がシルレル百年祭にも当たり、その上不思議な事には、此の狂言を始めてワイヤル^{ワッ}で演ったのが、

1804年の3月17日で、今度の興行の予定から言えば、17日が千秋楽に成る、こんな奇遇は無い」⁸と快諾したそうである。芝居そのものは、上演時間が短すぎて苦情が出るなどして「散々の不入り」⁹だったようだ。しかしこの『瑞西義民伝』は、小波が明治42年「少年世界」に載せたお伽詩篇『林檎的』及び大正4年「少年倶楽部」に載せた再話『ウィルヘルム・テル』とともに、シラーの名を一般に普及させるのにおおいに効果があったものと思われる。またこれをきっかけに二人のドイツ文学者、斎藤野の人（信策）と登張竹風の間で起こった論争も、日本におけるシラー受容の一面を表していて興味深い。

4

斎藤野の人は明治38年「帝国文学」第11巻9号の雑報に『現代の翻訳界に警告す』と題する文を載せた。彼は翻訳の技術がこの10年ほどの間に格段の進歩をとげたことを認めながらも、いまだに「多少外国語を知れると多少文筆の才ある」¹⁰にすぎぬ者たちが、近代日本にとって必須の西欧文学受容という重大な使命を自覚せず、軽薄杜撰な仕事をしているということに激しい怒りを表している。翻訳者は「彼を知るを第一義とするが故に尤も熱心に忠实」¹¹に、「細心精緻の学風」¹²でこれにあたるべきだと考える野の人には、当時流行した多くの翻案は「天才に対する一大誹謗」¹³に見える。分かりやすくするために背景を日本にとったり人物名を日本名に変えたりするのみならず、その戯曲の本質をも日本風に直してしまうものも少なくない。「嗚呼この人格理想の翻案没了はこれ誠に而戯曲の生命と意義を無にするものにあらずして何ぞや。[……]更に思へよ、シルレルの『キルヘルム・テル』を翻案して『義民伝』となし、此の偉大なる天才が以て万世の光明とならしめし自由の理想の意義を没了して佐倉義民伝的たらしめて而して尚シルレルの『キルヘルム・テル』なりと公言せば即ち如何、是に到りては其翻案の適否如何を問ふに違あらずして、吾人は直に此の如き翻案者の道義的良心の有無如何を問はむと欲す」¹⁴と、彼の悲憤慷慨は続く。

これに不快を覚えたらしい登張竹風は同年10月の読売新聞に『翻訳の辯』、『自縄自縛』及び『劇場を忘るる勿れ』¹⁵という題の反論を載せてい

る。野の人の西欧文学受容に対する熱い思い入れを、竹風は「詩歌の翻訳は、所詮芸術界の通辯たるに過ぎず。されば、翻訳家なるものは外国語を解せざる日本の民衆をして他国の文芸を知得せしむる媒介者の地位を出じ」¹⁶ として軽くいなそうとする。竹風の言うことはもっともなように見える。たしかに「独逸ならでは生まるることを得ざるゲーテを移して、日本の詩人と」¹⁷ することは不可能だ。翻訳は伝記評論ではないし、梗概的翻訳も場合によっては必要だろう。重訳については、たとえばシラーがフランス語から重訳したオイリピデスは「希臘詩人の翻訳中最も美なるもの」¹⁸ という評価を得ているではないか、とシラーを引いて弁護している。翻案劇に関しては、興行主、俳優、観客で成り立つ演劇という条件も考慮すべきだとして、野の人のあまりに過激な批判を「蜃気楼的杞憂」¹⁹ にすぎないと言う。だが竹風が小波の『瑞西義民伝』を弁護して、「今の劇場に出入りせる老若男女は、猶ほかくの如き翻案ならざれば解する能はざるに非ずや。芸術は固より神聖なるべし、然れども趣味の低き今の民衆を導かんには多少の手加減なかるべからず」²⁰ と言うのを聞くと、野の人の怒りはあながち杞憂ではなかったのかもしれないという気がしてくる。外国語の知識という明治時代においては比類なき武器を手にしたエリート学者たちが、異質な文化の神髄を、意識的にせよ無意識的にせよ、自分たちに都合よく変えて伝えるということも十分ありうるからである。

5

結局これは、学問的に厳密な受容を優先させるべきか、異質な文化の幅広い普及を重視するかということにつきるようで、あまり実りのある論議だったとは思えない。だがこのような論争が行われたこと自体、明治38年の時点でドイツ文学の受容がある段階に達していたことの裏付けにはなるだろう。ところでこの論争のなかで野の人と竹風が共に絶賛しているのが、藤澤古雪のシラー翻訳である。野の人はプラトーン全集、沙翁全集翻訳とならべて「藤澤古雪がシルレル全集」²¹ に言及し、「幾百の小才子よりも、寧ろシルレル訳を以て畢生の事業とする真摯の一翻訳家藤澤古雪氏を有するは我国の大なる幸福」²² と述べているし、竹風も「翻訳界の長足の進歩」の例として「シルレルが戯曲の翻訳」²³ をあげている。これは明治36年に

富山房より出版された『オルレアンの少女^{ちとめ}』を指すものと思われる。古雪藤澤周次は東京帝国大学英文科出身で学習院大学教授、「帝国文学」「新小説」「心の花」「太陽」などの雑誌に執筆していた。著書には明治36年出版の『ささやき』と明治40年出版の戯曲『がらしあ』、ゾーダーマンの『マグダ』の翻訳（「文明叢書」植竹書店大正5年）があるが、ざんねんながら『オルレアンの少女』以外のシラー翻訳は見当たらない。²⁴

『オルレアンの少女』がはじめて日本に紹介されたのは、明治26年の読売新聞付録に載った不知庵主人義訳『如安外伝』によってであると思われる。「シルレルの戯曲の独逸に有名なるは犬童走卒能く之を知り基作『オルレアンの女傑』の秀抜奇巧なるも人の能く知る処なり余は元来文字に拙なる者なれば此戯曲を訳して基の神韻を伝ふるものにあらず唯僅かに筋書を序述するのみ」という6月12日の前書で始まった『如安外伝』は、7回の連載で第2幕10場までの粗筋を語ったのち中断した。8月21日には「如安外伝中止につき」という記事を書き、不備な翻訳で原作を傷つけては原作者に対しても礼を欠くことになるので、「近日西欧の大文字が荐りに翻訳せらるるを見て密に自顧みて」この連載を中止する、と述べている。

『如安外伝』から10年をへて明治36年に出版された藤澤訳『オルレアンの少女』を見れば、この間に外国文学の受容並びに翻訳のあり方がいかに飛躍的な発展を遂げたかがわかる。藤澤はまず二回、原文どおりの逐語訳を試みた後、「なまなかに、晦渋なる鶴的の文字となさんよりはと、原文の許すかぎり、国劇化せんと努めたり」²⁵ と言っているが、戯曲家でもある藤澤の訳は流麗で、竹風が翻訳家に求めた「自国語の力」²⁶ を十分に発揮している。また明治37年の「帝国文学」書評の筆者が原文と照らし合わせたうえで「訳出の用意と手法に関しては、略間然する所なきに近し」²⁷ と保証しているように、これはテキストにほぼ忠実な完訳である。前述の「シルレル記念号」に「戯曲『オルレアンの少女』評論」を執筆している藤澤は、作品への詳細な注をつけ、巻末には「百年戦争の顛末」を載せている。これを見れば、翻訳者に学問的厳密さを求めた野の人の要求も十分に満たされていると言ってよいだろう。藤澤訳『オルレアンの少女』は名訳として明治43、44、45年と版を重ねる。新たな翻訳は、大正15年「世界婦人文献」6巻の内の一冊として出される佐藤通次訳『オルレアンの乙女』まで待たなければならない。

読書調査などの資料に欠けるため憶測の域を出ないのだが、当時の日本人にとって『オルレアンの少女』はシラーの作品中『ヴィルヘルム・テル』に次いで受け入れやすいものだったのではなからうか。というのもジャンヌ・ダルクという歴史的形姿は、シラー受容とは別のレヴェルで、すでに明治10年代から非常な人気を得ていたからである。「帝国文学」のシラー研究者たちが何を言おうとも、藤澤訳『オルレアンの少女』は一般にはジャンヌ・ダルク伝説のひとつとして受容された可能性が高い。

ヴィルヘルム・テルと同様にジャンヌ・ダルクの名も自由民権運動とともに普及した。明治20年の大阪国事犯嫌疑事件公判に唯一の女性被告として臨んだ福田英子は「東洋のジャンヌダーク」と新聞雑誌に書き立てられたし²⁸、彼女自身も『妾の半生涯』（明治37年）のなかで、「当時妾は[……] ジャンヌダークを理想の人とし露西亞の虚無党をば無二の味方と心得て」²⁹ いたと語っている。彼女が婚約者で自由民権運動家の小林樟雄がフランス語から訳した『ジャンヌダーク伝』を借りて熟読したのは明治10年頃のことらしいが、³⁰ 明治17年には村松操の『女侠全傳科戸風』（ジャンヌダーク伝の翻案）が出版されている。後藤宙外の自伝的作品『独行』（明治31年）に主人公の少年が「ジャンダークの悲壮な最後や、ローランド夫人が断頭台に登ろうとして、『自由よ、汝の名によって供せられたる犠牲は、そも幾許そ！』と言ったなどの事」³¹ を思う場面があるが、ここにも自由民権運動時代のなごりが感じられる。

明治前半の女性雑誌につきものの「烈女伝」というジャンルに、孝女白菊、望東尼、孟子の母等とならんでジャンヌ・ダークが登場するのも明治17年である。巖本善治が自ら創刊したばかりの「女学新誌」に山下石翁の筆名で列傳『女傑アークの傳』を連載している。明治22年には「日本之女学」に史傳『チャンデアークの傳』が連載される。明治26年読売新聞に掲載された前述の不知庵主人義訳『如安外伝』も、全く違和感なしにこのジャンヌ・ダーク伝説の流れのなかに収まってしまう。「家庭雑誌」は明治28年に（宮崎）湖処子の史談『オルレアンの少女』を、31年に「閨秀美談」という項目で桜川生の『ジャンダークの逸事』を掲載している。明治31年の「少年世界」には博文館「東西廿四傑」シリーズのひとつとして高山林

太郎（橋牛）の『ジャンヌ、ダルク』が載っている。博文館「世界歴史譚」のなかの『惹安達克』が中内蝶二著、山中古洞画で出版されたのは明治34年で、ここには「詩界の明星シルレルが霊筆に『オルレアンの処女』の名を歌はれて、芳名今に朽つることなき女丈夫」³²と、シラーへの言及も見られる。また同年には「女子之友」に勤林園主人の『ジャンダーク嬢の一節』が連載されるが、これは今までの烈女伝ふうのものとは少し趣を異にし、「誠に綺麗な、極優しい、上品な娘であった」³³ジャンダークに失恋した若者のエピソードなどを折り込んでいる。そして明治36年に藤澤訳『オルレアンの少女』が出るのである。

ジャンヌ・ダルクという素材は神、国家、家、女性という明治日本にとって焦眉の問題をはらんでいるために、その再話にはその時々時代の風潮が映し出されることになる。明治10年代から20年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし、「救国の英雄」という形で女性に社会参加のモデルを提供した。福田英子の心を捉えたのもこのようなジャンヌ・ダークだったし、キリスト教に基づく女子教育に生涯を捧げるようになる巖本は、『女傑アークの傳』を「世の諸娘嬢 [……] 常に未来の栄福を目的として国家の為に善事を行ひ玉ふべし」³⁴という言葉でしめくくっていた。しかし社会が安定期に入るにしたがって、このような啓蒙主義的傾向は次第に後退する。与謝野晶子の『みだれ髪』がその大胆な表現でセンセーションを巻き起こしたのは明治34年だったが、30年代も後半になると、世間一般の女性観はかえって保守化していく。高等女学校生徒数の激増にともなってその頃「女学生」が新しい風俗として登場し、世間の興味と反感をかったことも、その一因かもしれない。³⁵ 明治38年「ホトギス」に掲載された漱石の『我輩は猫である』にも、教養階級の男たちが「方今の女生徒」³⁶を痛烈に揶揄して溜飲を下げている場面があるが、これがこの時代の雰囲気だったのである。

7

ではこの時代のジャンヌ・ダルク像はどう変わっていったのだろう。明治37年「女学世界」定期増刊号の「婦人壮烈譚」に荒木嘯雨が書いた『オルレアン城救ひの女神』は、ジャンヌ・ダルクとは何の関係もない「日露

戦争未来の夢」などという挿絵まで添えて、まさに日露戦争のプロパガンダである。「国家の事必ずしも男子の手にのみ依るべきでない」³⁷と主張して「忠君愛国の英雄」ジャンヌを紹介するのだが、「敢て本編の主人公が鎧を着馬に乗った、基真似を仕て戴きたいと言ふではありません」³⁸ということわり書きに、あまり勇ましい女性は好ましくないという本音が覗いている。

明治42年「女学世界」掲載の剣影生による『女傑ジュアンヌ、ダルクの一生』は、同年（1909年）ローマで祝聖式が行われジャンヌ・ダルクが福女に認定されたことを受けての記述である。またこの年には南フランスのルルドで「福女ジャンヌ・ダルク」の奇跡がおこり、その結果ジャンヌは1920年（大正1年）聖女に昇格したのだった。死後ほぼ500年の後、神と国家のからみあう複雑な国際政治のなかで、フランスの国威高揚のシンボルとして復権したジャンヌ・ダルクは、同時代的関心の的ともなったわけである。³⁹

明治44年「婦人くらぶ」掲載の主筆澤田撫松による『將に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアン少女』では、明治37年の『オルレアン城救ひの女神』に見られた保守的傾向がより赤裸々なものとなっている。著者はまずジャン（ジャンヌ）を「普通的女子に比すべからざる美貌」を持った「人間ばなれのした天才」⁴⁰と特殊化することで、ジャンのモデル化を阻止しようとする。そればかりか、ジャンがその使命を果たした戴冠式の後にも軍隊に止められ、故郷の父母の下にもどって「家庭団樂の楽しみを享有」⁴¹することができなかった点を強調し、「ジャンは女である、少女である、固より軍人として適任者でない」、「ジャンは幸福であろうか」⁴²とくりかえす。まるで「花の如き妙齡の少女」が「火炎の中に白骨と化した」⁴³のは、ただ単に家庭に復帰できなかったためだったかのような口ぶりである。

この号には同じ著者による『覚醒せる婦人とイブセンのノラ』が掲載されているが、「覚醒せる婦人がはたして個人として幸福であるであろうか」⁴⁴という語り口はジャンに関するものと全く同じで、「女は人間であると同時に又女であることを忘れない様に教育せねばならぬ」⁴⁵という言葉がこの記事の結論となっている。帝国劇場で『人形の家』が初演され大反響をよんだこの明治44年は、「元始、女性は大に太陽であった」を巻頭に

かかげて雑誌「青踏」が誕生した年でもあった。保守的な女性雑誌がジャンヌ・ダルクを語るとき防御的な姿勢をとらざるをえなかったのも、当然といえるかもしれない。

このように明治後半期のジャンヌ像は当時の「婦人問題」を色濃く反映し、奇妙な矛盾を抱え込むことになった。女性も男性と同じく公的領域に出て信ずるもののために戦えという初期のメッセージは、「普通の」女性の幸福は私的領域にあるという教えに作りかえられていった。だがいかにしてジャンヌ・ダルク伝説を私的領域の物語に変えることができるのだろうか。このような流れのなかでシラーの『オルレ안의少女』をもういちど考えてみたい。明治におけるシラー受容の第二のピークの所産というべき藤澤訳『オルレ안의少女』は、ジャンヌ像の変遷のなかでどのような意味を持っているのだろうか。

8

藤澤周次は『オルレ안의少女』の「緒言」で、作品の概略を次のように述べている。

絳麗花の如き少女が、綺羅にも耐へざる身を以て、勝ちに誇れる英国軍を、瞬くひまに粉塵し。祖国を、その已に亡びたるに救ひ、功は一簣にして、全からんとせるに、端なくも天上より棄却すべく命ぜられたる、地上の愛は、彼女が心中に喚起され、それが為め、大命に背き、神慮に悖りて、一度は、敵軍の捕虜となりしも、遂に、基の天職を全うして、悲劇的最後を遂ぐるに至るまで、崇高なる勇氣、熱心なる概世的愛国心、敬虔なる信仰等、遺憾なく、描出せられたり。⁴⁶

シラーがあえてジャンヌ・ダルクの史実を離れてこの「ロマン的悲劇」を創作したこと、この点をめぐって従来から多くの論議がなされてきたことは、改めて言うまでもない。藤澤も明治38年の「シルレル記念号」によせた論文「戯曲『オルレ안의少女』評論」のなかでこれらの論議を紹介しているが、彼自身はこの作品の戯曲としての成功を何よりも重視し、あれこれあげつらうよりも作品の「深刻なる眩惑力」と「耐えざる吸引力」

がいかに「独逸国々民の心情」⁴⁷を捉えたかを知れば充分だとしている。藤澤は、ヨハンナに生じた「地上の愛」⁴⁸、「基れがために生し来たれる過失」⁴⁹がこの戯曲の核心であることを認め、シラーのこの「根本的思想に向かつては、吾人は異義を挿んやうなし」⁵⁰と断言する。そしてこの愛の場面について「芸術的に合理なるや否やを論ずるは全くの無用の労に属す。故に、吾人は唯この齣を愛し、基れによりて感動されなば、基れにて足れり」⁵¹と言う。

しかしこの点に関して藤澤はそれほど確信を持っていたわけではなさそうである。なぜなら同じ論文のなかで彼は、ヨハンナの愛を重視すべきではないとも言うからである。「かの有名なる独逸批評家ベレルマン」⁵²がヨハンナの愛をその性格の必然として詳細に分析していることに触れながらも、彼はこれに同調せず、「彼女の神秘的性質、及び常人が考へ及ばざる恋愛事件は、吾人をして自然なる同情の範囲外に彼女を置かしむるべきものなり」⁵³と主張する。ヨハンナの愛は「単なる挿話」にすぎず、黒騎士の場やカテドラルの場とともに「むしろ節約せしならば」⁵⁴と感ぜずにはいられないというのである。

この歯切れの悪さはひとつには、当時の主流であった国家主義的シラー像の影響とも考えられる。たとえば明治37年「帝国文学」の書評には、史実に反したヨハンナの死についても、これを「戦死てふ唯一の悲絶なる然かも名誉ある方法」による救済と解するならば、「詩人の理想的霊能の妙用」として容認できるのではないか、という意見が述べられている。⁵⁵ 藤澤もヨハンナは「基の祖国の為に仆れたる英雄的行為」によってのみ評価されるべきで、愛国心以外のものは「皆悉く忘らるべきもの」「軽々に看過するべきもの」⁵⁶だと言う。彼はシラーについて「狭義に解釈する時は彼は決して愛国者ならず」⁵⁷と述べているのだが、『オルレアンの少女』はもっぱら「愛国的戯曲」⁵⁸として評価すべきだと主張するのである。

このような論法にはまた、当時の学問のあり方がかかわっているのかもしれない。つまり論ずるべきは天下国家であって『『惚れる』『愛する』といふこと』⁵⁹ではない、という思い込みである。ヨハンナの恋は感動的だが私的な挿話にすぎず、戯曲の思想的核心はあくまで公的な救国活動にあるというわけである。こうしてヨハンナの「地上の愛」は私的領域に、救国の活動は公的領域にと分離され、両者の関係は問われない。となれば、

シラーがなぜヨハンナのなかに「地上の愛」と「大命」を結びつけたのか、なぜヨハンナは両者を一身に集めることによって古典主義的人間のシンボルとなったのかという問題、つまりシラー自身の時代性がこの論文の視野に入っていないのも当然である。

しかし訳者としての藤澤にはまた別の趣が感じられる。藤澤が訳した「地上の愛」の場面は感動的で、観客や読者を引きつけるに十分な技巧がこらされている。たとえば第3幕10場でライオネルと遭遇したヨハンナに関するト書には原文を補う濃やかな配慮が見られるし⁶⁰、心を惑わす音楽に聞きほれながら愛に悩む第4幕1場のヨハンナの独白は、藤村の抒情詩を思わせる情感のこもった七五調に訳されている。これを単に翻訳家の腕の冴えに帰してしまうことはできないだろう。藤澤が明治36年に出版した短編集『ささやき』の中心テーマは恋であった。ここにはイブセンの『人形のすまい』断片も含まれ、またある作品では、「東洋流の考」で女性を「生ける道具」とみなしてきた老将軍が「はじめて真に恋せし」相手が息子の嫁だったという悲劇が語られている。⁶¹ 藤澤にとって恋は「軽々に看過するべきもの」どころか、むしろ従来の人間観を揺るがす重大な問題だったのではなかろうか。「恋愛」という新しい言葉が、北村透谷の「恋愛は人生の秘鑰なり」（『厭世詩家と女性』明治25年）を導火線として、『金色夜叉』や『不如帰』などの人気とともに一般にも普及し、明治30年代に「日本語の言説の中に自然な形で定着」⁶²する過程を、藤澤も共にたどって来たはずである。だから訳者としての藤澤が、学者としてとった立場とは違って、ヨハンナの「地上の愛」をこの戯曲の中心に置き、愛着をこめて描いたとしても不思議はないと思われる。

9

明治38年出版の「シルレル記念号」の文献表にもあげられていたルートヴィッヒ・ベラーマン (Ludwig Beller mann) の『シラーの戯曲』(1898)は、現在では「ヴィルヘルム二世期特有の偏見や確信をあらわすもの」⁶³とされているが、明治時代の『オルレアンの少女』受容を考える際には興味深い資料である。シラーがジャンヌ・ダルク伝説に愛の試練・克服・栄光というモチーフを付け加えて古典主義的人間の理想像を作り上げたこ

とに、ベラーマンは全面的な理解を示し、「ライオネルへの恋によって生じた彼女の深い心の葛藤」⁶⁴こそこの戯曲のもっとも重要な内容だと明言する。ヨハンナの戦いは内面の戦いなのだ。ヨハンナは戦争や陰謀などの外的な出来事の犠牲になるのではなく、自分の内面に生じた愛と義務の相剋の犠牲となるのである。「大命」のために「地上の愛」を克服してはじめてヨハンナは、うつろいやすい肉体から永遠の美しい魂へと変容することができる。伝説のジャンヌ・ダルクのように救国の「大命」を成就しただけでは古典主義的人間の理想像となることはできない。しかも「地上の愛」はヨハンナにとって救国の「大命」と同等の重さを持っているのであれば悲劇は成立しない。

そこでベラーマンは、藤澤論文のなかでも言及されていたように、ヨハンナが本来いかに愛すべき、また愛されるにふさわしい女性であったかをくりかえし強調する。「愛の能力」⁶⁵を十二分にそなえたヨハンナの苦悩と克服こそが観客に深い感動を与えるのであって、恋も知らず一途に救国の戦いに邁進する意志堅固な女であっては、シラー悲劇の主人公たりえないのである。だからこそヨハンナは「女らしさの領域から逸脱したワルキューレではなく、やさしい、女らしい感情をもった女性」⁶⁶として描かれ、史実に反して敵を殺戮する戦闘の場のヨハンナにさえシラーは「女らしい優美な魅力」⁶⁷を与えている、とベラーマンは言う。「神の戦士、つまり力と精神を全身に漲らせた存在であって、同時に恋する女、つまり弱く献身的であることは、不可能だ」⁶⁸という主張はたしかに「ヴィルヘルム二世期特有の偏見や確信」であろうが、それはおそらく明治後半期にも共通する考えであったことだろう。

ジャンヌ・ダルク伝説の核心部にこのような「女性的なるもの」が置かれるということは、まさにドイツ古典主義の特質と言わなければならない。女性にも古典的人間性の理想を体現する資格が与えられたのだから、ここに女性を励ますメッセージを読みとる人がいても不思議はない。たとえばルイーゼ・ブラッハマン (Luise Brachmann) は1802年シラーにあてて、「この気高い女主人公がこれほどにも偉大にすばらしく描かれているのは、ただ私たち女性が弱い心而建て直し、勇気を奮い起こすことができるように励ますためなのです」⁶⁹と感謝の手紙を送っている。だがシラーのヨハンナ像には二重の意味があることを忘れてはならない。シラーは伝説のジャ

ンヌ・ダルクに内面性を付与し人間としての尊厳を与えたが、その結果として彼女を滅ぼしたのである。ベラーマン流に言えば、女性にとって愛と使命はこの世では両立しえないのだから、愛を知ったヨハンナは、まさにそれ故に、滅びざるをえない。これに感動する人々が、愛こそ女性にとって欠くべからざる本質であって、それ以外のことは女にふさわしくないという、近代市民社会にとって都合のいいメッセージを読みとるのは簡単である。シラーのヨハンナはヴォルテールの『処女』への反駁であるばかりではなく、フランス革命の自由の戦士としてのジャンヌ・ダルク像を排撃する意図を持つ反対象でもあった⁷⁰ というのも、うなずける話である。

10

このようなヨハンナ像はシラーの時代の教養市民階級の心をとらえたと同様に、明治後半期の日本人にとっても歓迎すべきものだったはずである。というのも、維新以来西欧をモデルとして急速に近代化をおしすすめてきた明治日本は、啓蒙主義の時代と自由民権運動の時代を猛スピードで通り抜けて安定期に入り、この頃になってようやく教養を基盤とする新しい階層社会とでも言うべきものが成立しつつあったからである。近代的「家」制度や女らしさの基準はこの頃に確立した。⁷¹ このような社会の進展とともに日本に紹介されるジャンヌ・ダルク像が変貌していったのはすでに見たとおりである。近代国家にとって女性の力は必要だが、あくまで女性にふさわしい範囲で力を発揮すべきで、その限界を踏みはずしてはならないという教を世間に広めることが必要になったちょうどその頃、藤澤訳『オルレアンの少女』は出版されたのだった。ここにジャンヌ・ダルク伝説を私的領域の物語に読みかえる契機が含まれていたのは、あまりにも出来すぎた偶然ではなからうか。

藤澤訳の『オルレアンの少女』が絶賛されて版を重ねたことはすでに述べたが、『オルレアンの少女』の上演に関しては、大正3年1月演技座において初演という記録があるばかりでくわしいことはわからない。⁷² だが斉藤野の人が明治38年に翻訳界を批判した前述の文章のなかに、『ヴィルヘルム・テル』とならんで『オルレアンの少女』についての言及があり、厳正な受容の必要性を主張する野の人が「シルレルが体现した一切の理

想と偉大を外にして豈この『オルレアンの少女』あらむや」⁷³ と、さかんに憤慨し苛立っているところを見ると、この作品も『ヴィルヘルム・テル』と同じく一般にかなり普及していたのではないかと思われる。記録には載っていないが、翻案上演された可能性もないとは言えない。

『オルレアンの少女』がどのように受け入れられ、一般にどんな影響を及ぼしたのかは、今のところ想像するしかない。ただその手掛かりになるのは大正5年、川上貞奴一座が大阪の中座、神戸の聚楽座、名古屋の御園座で上演した『ジャンヌダーク』である。⁷⁴ ある劇評は「宮殿から火刑までは大仕掛けな舞台装置と照明ですばらしい迫力」だったと褒めた後、「貞奴のジャンヌダークは、男装もよくうつり、正義の戦いにあくまでも処女の心を失うまいと誓いながら恋のため、もろくもくずれてゆく過程がたくみに表現された」⁷⁵ と述べている。ここにはシラーの『オルレアンの少女』が混入しているのではなかろうか。貞奴の芝居にどのような成り行きでこの見せ場が作られたのか、藤澤訳の『オルレアンの少女』や演技座での初演がこれに影響を与えているのか否かは、資料がないため何とも言えない。しかし愛と使命の板挟みになって苦しむ女らしいヒロインが、豪華で西洋風の背景ともあいまって、当時の観客に感動を与えたことは確かだろう。このような通俗演劇にシラーの影響を見るのはシラーへの冒涇だと考える人もあるだろうが、筆者はむしろここに日本におけるシラー受容の重要な一面を見たいと思う。

くりかえすならば、明治後半期、国家の制度化と国民の統制を押し進めていた指導者層は、西欧近代の精神に触れて自我に目覚め自由を求めはじめた女たちを何とか制御しようと努めていた。これを放置すれば、彼らの考えるような国家の秩序は保たれないからである。おりしも明治36年シラーの『オルレアンの少女』が翻訳出版された。もし彼らがこれを読んだとしたら、会心の笑みを浮かべたことだろう。というのも、自由民権運動の時代から人気が高く、愛国主義という点でも無視できないジャンヌ・ダルク伝説を私的領域の物語に読みかえ、壮絶な戦いの主人公を愛に悩む少女に変貌させるために、この名作は願ってもないきっかけを与えてくれたからである。ちょうどこの頃、学問として確立しつつあった日本のゲルマニスティックがとりわけシラーを賛美し、さらに藤澤のこの翻訳が多くの学者から称賛されたことも、好都合だった。ジャンヌ・ダルク伝説のこのような

読みかえに、ある種の権威を与えてくれたからである。実際シラーは当時、崇敬の念をもって学ぶべきものであった。その作品において古典主義的人間の本質と讃えられる「愛」が、人々の目に西欧から学びとるべき貴重な価値と見えたとしても不思議はない⁷⁶。「愛のヒロイン」として観客の紅涙をしばった貞奴の『ジャンヌダーク』も、この流れのなかのひとつのバージョンだと思われる。こうして女性は「愛」によって高められ、同時に無害化されていく。「愛のヒロイン」というイメージはその後さまざまな蓄積され、その呪縛から逃れるのは容易なことではなかったのである。

注

- 1 『オルレアンの少女』第一版の奥付のみ藤澤周治、それ以外は周次となっている。
- 2 「帝国文学」臨時増刊第二「シルレル記念号」大日本図書 明治38年 ページなし。
- 3 樋口一葉全集 第3巻上 筑摩書房 昭和51年 103ページ参照。
- 4 永嶺重敏 『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部 1997 12ページ参照。
- 5 「中学世界」第3巻第6号 博文館 明治38年 76ページ。
- 6 「ムラサキ」2巻5号 読売新聞日就社 明治39年 28ページ。
- 7 松本伸子 『明治演劇論史』演劇出版社 昭和55年 381ページ参照。
- 8 木村錦花 『明治座物語』歌舞伎出版部 昭和33年 291-2 ページ。
- 9 同上 293ページ。
- 10 「帝国文学」第11巻9号 明治38年 118ページ。
- 11 同上 117ページ。
- 12 同上 123ページ。
- 13 同上 126ページ。
- 14 同上 127ページ。
- 15 『明治文学全集』40 筑摩書房 昭和45年 333-6 ページ。
- 16 同上 334 ページ。
- 17 同上 333 ページ。
- 18 同上 335ページ。
- 19 同上。

- 20 同上 336ページ。
- 21 「帝国文学」 第11巻 9号 明治38年 117ページ。
- 22 同上 123ページ。
- 23 『明治文学全集』40 335ページ。
- 24 『日本近代文学大辞典』 第3巻 講談社 昭和52年 171ページ参照。
- 25 藤澤周治 『オルレアン少女』 富山房 明治36年 3ページ。
- 26 前掲の『明治文学全集』40 335ページ
- 27 「帝国文学」 第10巻第3号 明治37年 132ページ。
- 28 福田英子 『妾の半生涯』 岩波書店 1994年 166ページ。
- 29 同上 64ページ。
- 30 同上参照。
- 31 『明治文学全集』65 筑摩書房 昭和52年 339ページ。
- 32 中内蝶二（奥付には義一）『惹安達克』博文館 明治34年 126ページ。中内は同年「新文芸」に『ウィルヘルム、テル』を翻訳掲載している。
- 33 「女子之友」 第85号 東洋社 明治34年 9ページ。
- 34 「女学新誌」 第16号 修正社 明治18年 188ページ。
- 35 樋田満文 『明治大正新語・流行語』 角川書店 昭和58年 184-6ページ、小森洋一・紅野謙介・高橋修編 『明治30年代の文化研究』 小沢書店 1998年 211ページ参照。
- 36 『夏目漱石全集』 第1巻 岩波書店 昭和49年 204ページ。
- 37 「女学世界」 定期増刊号 博文館 明治37年 17ページ。
- 38 同上。
- 39 大正4年に箕作元八が詳細な歴史書『西洋史新話第七冊 オルレヤンの乙女』を出版したのもこの流れのなかにあると思われる。
- 40 「婦人くらぶ」 第4巻第10号 紫明社 明治44年 71ページ。
- 41 同上 71ページ。
- 42 同上 80ページ。
- 43 同上。
- 44 同上 3ページ。
- 45 同上 9ページ。
- 46 藤澤周治 前掲書 1-2ページ。
- 47 前掲の「シルレル記念号」 239ページ。
- 48 同上 240ページ。
- 49 同上 242ページ。

- 50 同上。
- 51 同上 244ページ。
- 52 同上。
- 53 同上 250ページ。
- 54 同上 245ページ。
- 55 「帝国文学」 第10巻第3号 132ページ。
- 56 前掲の「シルレル記念号」 250ページ。
- 57 同上 247ページ。
- 58 同上 250ページ。
- 59 同上 242ページ。
- 60 藤澤周治 前掲書 149、152、153ページ参照。
- 61 藤澤古雪 『ささやき』 金港堂 明治36年 31ページ。
- 62 佐伯順子 『「色」と「愛」の比較文化史』 岩波書店 1998年 105ページ。
- 63 Wolfgang Freese und Ulrich Karthaus (Hg.): *Erläuterungen und Dokumente. Die Jungfrau von Orleans*. Stuttgart 1984, S. 100.
- 64 Ludwig Bellermann: *Schillers Dramen*. Berlin 1908, S. 316.
- 65 Ebd., S. 289.
- 66 Ebd., S. 269.
- 67 Ebd., S. 270.
- 68 Ebd., S. 266.
- 69 Wolfgang Freese und Ulrich Karthaus (Hg.): a.a.O., S. 84.
- 70 Vgl. Inge Stephan: *Hexe oder Heilige? Zur Geschichte der Jeanne d'Arc und ihrer literarischen Verarbeitung*. In: *Die verborgene Frau*. Mit Beiträgen von Inge Stephan und Sigrid Weigel. Berlin 1983, S. 56.
- 71 上野千鶴子 『近代家族と成立と終焉』 岩波書店 1996年 69-99ページ、小森洋一・紅野修編 前掲書 217ページ参照。
- 72 『演劇大百科辞典』 第1巻 平凡社 1986年 497ページ参照。
- 73 「帝国文学」 第11巻9号 127ページ。
- 74 藤野義雄 『御園座70年史』 昭和41年 116ページ、田中栄三 『明治大正新劇史資料』 演劇出版社 昭和39年 130ページ参照。
- 75 藤野義雄 前掲書 116ページ。
- 76 巖谷小波が「少女世界」(明治39年創刊)において、内面的な「愛」に基づく新しい「少女らしさ」「女らしさ」を提唱したことも、この関連で興味深い。小森洋一・紅野修編 前掲書 217ページ参照。

Jeanne d'Arc in der Meiji-Zeit

Rezeption von Schillers *Jungfrau von Orleans*

Hiroko WATANABE

Die Jungfrau von Orleans wurde 1903 von Shūji Fujisawa zum erstenmal vollständig übersetzt. Damals erreichte die Rezeption Schillers in Japan einen Höhepunkt, während es mit dem gestärkten nationalen Selbstbewußtsein zu einem modernen Staat heranwuchs. Im Jahr 1905, dem 100. Todesjahr Schillers, gab „Teikoku-bungaku“ das Schiller-Heft heraus, das ein großer Verdienst für die Schiller-Rezeption in Japan war. Aber man darf zugleich nicht übersehen, daß hier ein einseitig idealistisches und nationalistisches Schiller-Bild gezeichnet wurde. Fujisawas Orleans-Übersetzung, die wissenschaftlich und literarisch damals viel gepriesen wurde, war auch eine Frucht dieser Zeit.

Die Gestalt von Jeanne d'Arc genoß in der Meiji-Zeit auch in anderen Bereichen eine große Popularität. Sie erschien sehr häufig in Zeitschriften für Frauen und Jugendliche. Dieses Frauenbild war abhängig vom politischen und ideologischen Standort des jeweiligen Verfassers. Am Anfang wurde diese Gestalt nämlich als Modell des politischen Engagements von Frauen bewundert. Aber mit der Zeit erregte diese Heldin Ärgernis, weil sie den Weiblichkeitskodex der damaligen Zeit sprengte. Deshalb wurde es nötig, die Kämpferin für das Vaterland zu einer weiblichen Heldin zu stilisieren, ohne den patriotischen Kern der Geschichte zu verderben. Dazu bot wohl die Orleans-Übersetzung, die gerade damals herausgegeben wurde, eine sehr günstige Gelegenheit. Denn Schillers Johanna ist als Sinnbild des klassischen Menschheitsideals sowohl eine Patriotin als auch eine liebende und lebenswürdige Frau, die im Heldentod ihr inneres Problem löste. Dieses Johanna-Bild hinterließ, wenn auch kitschig verändert, in einem Theaterstück von Sadayakko seine Spuren.